

## 【1】現在の仕事

日本経済新聞社という会社で新聞記者をしています。1987年春に大学を卒業し入社、その後30年近く「日本経済新聞」「日経マガジン」などに記事を書いてきました。

取材対象は政府機関や政治家、企業、学者、芸術家や芸能人など多岐にわたります。株式市場や為替相場など、時々刻々と変わる市場の数字を追いかけた時期もありました。しかし私自身ももっとも力を入れてきたのは、有名人や社会的に力を持つ人たちではなく、無名だけれどその人ならではの仕事や活動をしている人たちの取材です。

人間関係などの悩みから自殺した娘さんが遺した文と絵を集め、出版したお父さんを取材したことがあります。「同じように苦しんでいる若い人たちが読んでくれたら」。夏の午後、広いとはいえない団地の一室で、そう訥々と語る言葉をメモし続けました。

古民家を改装し、地域の人たちが交流するカフェを開業した若者。過疎の村の廃校をアトリエ兼ギャラリーに改装し移住した画家。自分らしく生きる権利のために奔走するLGBT（性的少数者）の活動家。国内で、あるいは海外で、貧困や差別に悩む人たちのために何かをしたいとNPO（非営利団体）を立ち上げた人々。彼ら、彼女らの挑戦とその背景、考え、夢、願い、悩みなどを、1人でも多くの人に知ってほしい。そんな思いが取材活動の原点にあります。私自身もこうした人たちの言葉から時に勇気を、時に自分の人生を見つめ直す機会をもらってきたと感じます。

2011年に起こった東日本大震災の取材も、報道という仕事の意味を根底から問われる体験でした。この大災害に関わる取材を全くしなかった記者は、おそらく社内にはいないはず。被災者の体験や教訓、後悔を皆で共有し、せめて「次」への備えに生かさなければ——。そう思い、目の前に広がる悲惨な光景に尻込みしたくなる自分を鼓舞しながら取材にあたりました。

## 【2】高校時代とのつながり

新聞記者になろうと決めたのは高校3年生の秋です。

高校時代の前半、正確には2年生の9月末までの1年半は、校内の行事にどっぷりと漬かって過ごしました。当時は9月の1カ月間が「立高祭」の本番で、水泳大会、外部のホールを借りた演劇コンクール、校舎を使った展示、校庭での体育祭にファイアーストームと、毎週のように大がかりな催しが開かれ、そのために2年生が中心となり長い時間をかけて準備し、当日も運営していたのです。

高2の夏、文化祭実行委員会の一員だった私は裏方として駆け回る一方、自分のクラスやチームの準備にも参加し、さらに1年生の秋に仲間と立ち上げた映画同好会で撮る自主製作映画にも端役で出演したりしていました。毎日が目の回る忙しさで、直前は夜も誰かの家に泊まり込んでの準備作業。52年間の人生で、この時の立高祭が終わったときほどの虚脱感を味わったことは、いまだにありません。

こうした活動の中で生まれた人間関係が、残り1年半の高校生活の糧になりました。運動系クラブや音楽活動でも同じだと思いますが、余裕のない、ぎりぎりの中で誰かと何かを一緒に作るとき、人は飾ったり格好をつけたりしてはいられません。限界や欠点も含め、自分のすべてをさらけ出すことになりま

す。そうした中で、初めて生まれる信頼や共感があるような気がします。生きる意味とは何か。社会はどうあるべきか。自分にできることはあるか。受験とは。仕事とは。家族とは――。高2の秋から3年生にかけて、教室や喫茶店で、そんな話を飽きずに繰り返したことを覚えています。互いにどういう人間がわかっているのか、遠慮や過剰な気遣いは、もう要らないのです。

3年生の秋、1人の友人が、有名な新聞記者が書いたルポルタージュを2冊貸してくれました。「今の日本の問題点を的確に指摘していて自分には新鮮だった、きっと君も気に入ると思うよ」、と。この2冊の本がその後の人生を決めました。友人の見立てどおりそれらの本は非常に面白く、同じ著者の本を何冊か買って読み進むうちに、「自分もこうした文章を書く仕事をしたい」「世の中を良くするために働きたい」と思うようになり、新聞記者を第1希望に定めたのです。マスコミへの就職に実績のある大学・学部を調べていくつか受験し、1年浪人した後、一橋大学の社会学部に進学しました。

この大学には小規模校ならではの良さがありました。1つは毎週1回、少人数の学生で教授を囲み、じっくり議論する「ゼミナール」制度の存在。ふつう1人の学生が所属するゼミは1つだけですが、せっかくなので私は2つのゼミ（社会心理学と戦後政治史）に掛け持ちで参加しました。もう1つの長所は他の学部の講義も自由に受講できることで、言語学、人類学、憲法、刑法、国際関係にアジア経済と雑多な授業を受講しました。特定の分野を深く掘り下げるより、広くいろいろな知識を身につけたいと考えたのです。並行して学内雑誌を編集するサークルに入り横田基地などを取材したり、リュックを背にユーラシア大陸を鉄道とバスで一周したり。生涯の伴侶となる相手と出会ったのも学内の読書会でした。4年生になり新聞社4社を受験、内定を得た日本経済新聞社に就職し今に至っています。

### 【3】高校時代の過ごし方への助言

私たちは、なぜ高校という場所に通い、教室という箱の中に3年間も身を置くのでしょうか。受験勉強だけなら予備校があります。知識を仕入れたければインターネットもあります。もしかしたら高校の授業より効率的かもしれません。

同世代の人たちと深く関わること。そして自分とは何かを知ること。私には、それこそが高校という場所に通う最大の意味だと思えます。そうして、できれば一生使い続けられる自分なりの「ものさし」を手に入れ、卒業式を迎えてほしいのです。

高校卒業後は進学、就職、結婚、職場の異動、転職、出産、病気など、自分で道を選ばなければならない機会がどんどん増えます。誰も正解を教えてはくれません。何度も迷い、壁にぶつかると思います。親も先生も上司も先輩も、助言はしてくれますが、最後に決めるのは自分です。自分のものさしで選び、自分で責任を負うしかないのです。

自分にとって一番大事なものは何か。譲れない価値は何か。許せないことは何か。自分1人で自分の心を見つめても、なかなか形は見えません。同じ分岐点に立つ仲間と疑問や考えをぶつけ合い、時に厳しく批判される中で、ようやく本当の自分が見えてくるのではないのでしょうか。子供時代の延長である中学とも、大人の時間の始まりである大学とも違うのが高校です。この特別な3年間を、「無難にやり過ごす」だけ、あるいは自分1人の受験勉強だけで終わらせるのは、もったいなく思えます。

私自身、中学までは内向的で引っ込み思案な子供でした。立高の3年間で人と関わる楽しさを知り、新しい自分や、入学時には想像もしなかった未来に出会ったのです。立高という舞台を生かし、未知の自分を見つけてください。みなさんの高校時代が刺激と発見に満ちたものであるよう祈っています。